

氏名(本籍)	まえ づる まさ かず 前 鶴 政 和 (鹿児島県)
学位の種類	博 士 (経 済 学)
学位記番号	博 甲 第 2760 号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	社会科学研究科
学位論文題目	国際寡占競争下における貿易・産業政策に関する理論的研究
主査	筑波大学教授 経済学博士 酒井泰弘
副査	筑波大学教授 経済学博士 井上正
副査	筑波大学教授 経済学博士 平山朝治
副査	筑波大学教授 経済学博士 土井正幸

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、国際寡占競争下における貿易・産業政策に関する理論的研究を行い、新しい分析結果を導き出すことである。近年において、寡占理論の発展はめざましく、それを国際貿易・産業政策に応用する試みが幾つかあるが、本論文はこういう流れに沿って、著者独自の新しい知見を提供することを意図している。

従来の貿易理論で代表的なりカード・モデルやヘクシャー＝オリーン・モデルによれば、貿易は比較優位によって生じるものである。そこでは、完全競争の仮定が設けられており、各国は自分と違う国と貿易をすることによって利益を得ると考えられていた。ところが、戦後の世界貿易の中心になってきたのは、南北貿易のような異質な国の間の貿易ではなく、同質的な先進工業国間の貿易であり、伝統的貿易理論の比較優位説の限界が明らかになってきた。この点から最近において、同じような環境にある国の間での同様な産業における双方向の貿易を解明できるような理論が必要となったわけである。

著者は上述の学界の流れに沿って、寡占競争下の貿易・産業政策の理論を精力的に行い、さらに研究開発や情報の非対称性との関連について新しい分析結果を導き出すことに成功している。

本論文は、全体で六つの章から構成されている。第1章は「寡占競争下の貿易理論——展望」と題されており、これまでに研究されてきた寡占競争下の貿易理論が手際よく展望されている。国際寡占競争に自国政府のみが介入する場合には、クールノー・モデルでは輸出補助金がベターであり、ベルトラン・モデルでは輸出税がベターであることが理論的に示されている。

第2章は「国際複占競争下における研究開発政策とスピルオーバー効果について」と題され、第三国市場に財を輸出する自国と外国の企業が(費用削減のための)研究開発投資を行う場合に、両国政府が供与するR&D補助金によって経済厚生がどのように変化するかが分析されている。もし研究開発のスピルオーバーの程度が十分大きいならば、両国政府のR&D補助金によって両国の経済厚生はむしろ改善される可能性があることが解明されている。

第3章は「共同研究開発と関税政策との関連について」と題され、二国の企業が共同して研究開発投資を行う場合に、第三国の一律関税政策によって、両国および第三国の経済厚生がどのように変化するかが分析されている。その場合には、一律関税政策の効果として、両国および第三国の経済厚生が縮小されがちであることが示されている。第4章は「垂直的市場構造、知的所有権保護及び貿易政策」と題され、先進国の中間財生産者

が研究開発投資を行う場合に、発展途上国の政府がその研究開発投資の成果を知的所有権として保護し、先進国が関税を課すという複雑な状況が分析されている。

第5章は「非対称情報の貿易政策について」と題され、自国政府と外国企業の間で、外国企業の費用に関する情報の非対称性が存在する場合に、外国企業の第一期の生産量から外国企業の費用を推定して、自国政府が第二期の関税率を決定するという二期間モデルが分析されている。

第6章は「国際複占競争と研究開発競争——動学分析」と題され、研究開発に関する動学モデルが分析されている。このモデルにおいては、二国の企業が第三国市場に輸出している場合に、各時点において研究開発投資の決定が行われ、研究開発資本が時間的に蓄積されていくようなダイナミックな状況が取り上げられている。そして、自国政府のR&D補助金の効果も合わせて説明されている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、国際寡占競争下における貿易・産業政策に関する非常に緻密な理論的研究として高く評価できる。この分野は最近において内外の経済学界において注目されてきており、著者の労作はまことにタイムリーであると思量される。本論文における著者のオリジナルな点を敷衍すれば、次のようである。

- (1) 従来の理論の多くは完全競争に立脚し、異質な国の間の貿易を分析したものであった。これに対して、著者はもっと現実的な観点から、同質的な先進工業国間の不完全競争に着目し、「国際寡占の理論と政策」といえるものの構築を目指そうとする点で相当に評価されてよい。実際、本論文の一部はすでに学界で発表されており、研究者の間で高い評価を受けている。
- (2) 本論文の取り扱う分野では、かなりの数学的素養とモデル演算能力が要求されるが、著者はこれに相応しい資質を備えている。この点に関して、著者のたゆまぬ精進と努力を高く買うものである。
- (3) 著者は最後の6章で、ダイナミックな貿易理論の構築を目指しており、これはきたるべき発展方向を十分に予感させる。この意味において、著者の研究は時代を少々先取りしたものであるとみなせよう。
- (4) もし本論文に敢えて難点を見つけようとするれば、それが余りにも数学的な理論分析に終始しており、現実経済との対応がいささか不十分ではないか、ということであろう。しかし、このことは学位請求論文としての本論文の価値を基本的に損なうものではない。著者による今後の研究の一層の発展と努力を期待したいと思う。よって、著者は博士（経済学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認められる。